



江戸のベストセラー作家、井原西鶴の浮世草子には、現代にも通じるさまざまな教訓が詰まっている。代表作『日本永代蔵』や『世間胸算用』から大阪商人の生活力を物語る一節を紹介し、今を生き抜くための暮らしの知恵を学ぶ。

大阪商人の生活力

西鶴の教訓

中嶋隆
Nakajima Takashi

江戸時代の本屋は、出版総合企業

現代日本の大都会は、東京と大阪である。それに、文化都市京都を加えた3大都市は、江戸時代にも「三都」と呼ばれて繁栄していた。「大阪」と書くようになったのは明治時代からで、江戸時代は「大坂」と表記したので、これから後の文章では基本的に「大坂」と書くことにする。



「井原西鶴像(模本)」。当時人気を博した数々の浮世草子は、大坂商人の生活力を今に伝える。所蔵／東京国立博物館 Image: TNM Image Archives

ところで、現在の大阪城を建てたのは豊臣秀吉だと思っっている方が多いかもしれない。実は、江戸幕府の2代将軍徳川秀忠が再建したお城が、今の大

坂城である。太閤秀吉の子秀頼と母淀君が死んだ大坂夏の陣で、大坂城は焼失、幕府はその跡に盛り土をして、新たに大坂城を建築した。

城だけではなく、この戦で秀吉の造った大坂の都市基盤が崩壊した。幕府は、この地を天領(直轄地)にして、新たな町割り(都市計画)に基づいたインフラ整備を行った。江戸堀・京町堀・阿波座堀・立売堀など運河を開き、伏見町人を移住させるなどして、都市機能を再生したのだ。

べて遅れていた重要産業があった。出版業である。

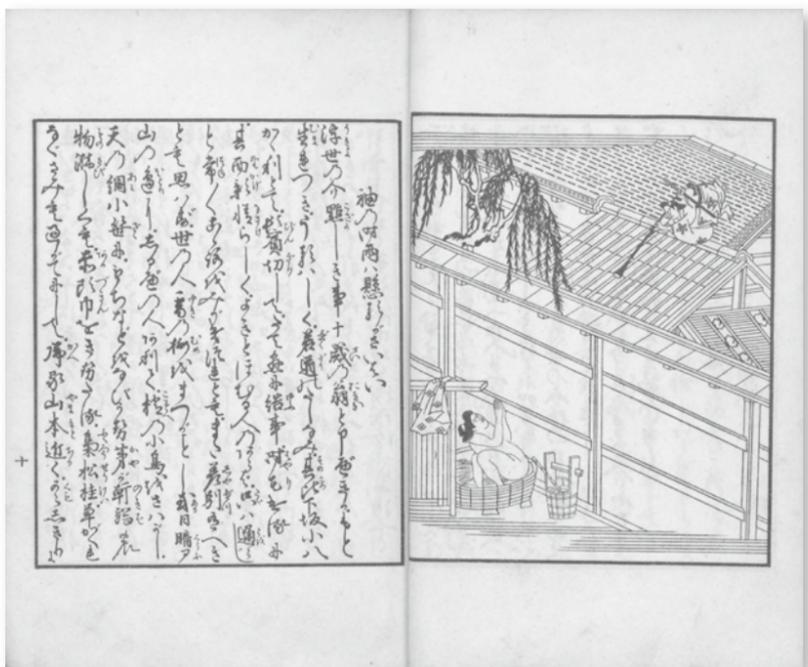
自動車や電気製品が主要な工業製品となった現代人の感覚からいうと、たかが出版業と思われるかもしれない。しかし、江戸時代の主要工業製品は、織物と陶磁器、それに本である。織物も陶磁器も大坂ではあまり生産されていない。ということは、大坂には、地場産業が育っていなかったということになる。

楮こうぞを主原料とした紙、文字や絵を彫る桜の板。これが本作りに最低限必要な物産だが、特に紙は高価な工芸品である。今と比べて、流通商品として重要性が格段に高かった。それに出版業は、版下書き、絵師、彫り師、摺り師、表紙屋等、本が出来るまでの就業人口が多い。

大坂に井原西鶴というベストセラー作家が彗星の如く登場する。それをきっかけにして、大坂の出版業が育っていくことになる。

日本初のベストセラーは、出版文化「後発」都市大坂で生まれた

大坂では、1671(寛文11)年まで本屋がなかった。こういう重要な地場産業が、なぜ欠けていたのかというと、出版先進都市の京都が近くにあったからだ。



井原西鶴『好色一代男』巻1-3「人には見せぬ所」より。主人公の世之介が9歳のとき、屋根の上から遠眼鏡で、行水する女を覗いている場面。所蔵／国立国会図書館

今も昔も、お寺さんには学識豊かな金持ちが多い。1640年代(寛永年間末期)には出そろう京の老舗本屋は、僧や上層町人に、仏書や漢籍類などの書物を買って、経営基盤を固めた。寛永期の京都では、約百軒の本屋が確認できる。江戸でも、大坂より早く本屋が起業していた。1650年代(明暦・万治ごろ)には本屋が存在した。大坂より約20年早い。

そういう出版文化の「後発」都市大

坂で、西鶴『好色一代男』が刊行され、ベストセラーとなった。1682(天和2)年のことである。

現代では、大出版社が、これぞと思う本の装丁や広告に金をかけ、小売り書店の目につきやすい棚を確保して、資金力でベストセラーが創り出される場合が多い。そうかと思うと、書店とコネもなく宣伝費もかけられない中小出版社の刊行物が、徐々に部数を伸ばし、ある時点で爆発的な売れ行きを見

せる場合も稀にある。

『好色一代男』は後者のケースだった。なにしろ、この作品は大坂で出版された最初の小説である。「荒砥屋孫兵衛」という本屋も『好色一代男』しか刊行物が確認できない。それが、大坂だけではなく、江戸でもブームを起こした。西鶴自身が驚いたか、「してやった」と思ったのかは分からないが、当時の出版・流通の常識をくつがえした事件だった。

メディア・ミックス戦略の先駆者

西鶴の本業は俳諧師である。大阪市天王寺区の「生玉さん」(生國魂神社)の境内に西鶴の座像がある。髪を剃っているのので、お坊さんかと思った方もいるかもしれない。半分は当たっているが、厳密にいうと違う。

西鶴34歳のとき、25歳の妻が3人の子を残して病没した。西鶴は、まもなく法体ほつたしたのだが、僧になったわけではなく、家業をやめて隠居したので。再婚はしなかった。家業をやめたといっても、分かっているのは大坂の商人だということだけで、何を商って、どのくらいの金持ちだったのか、きちんとした資料が残されていない。

妻が死んだあと、1675(延宝3)年に『俳諧独吟一日千句』という俳諧書を出版した。これは、575・77・



575・77...と句を連ねて、1日で1000句を詠んだ追善集。妻を追善したという点では日本で最初の句集である。何よりも驚くのは、86・4秒に1句の割で句を作ったそのスピードである。

スピード重視の俳諧は「矢数俳諧」に発展する。この俳諧は、観客の前で、1日に何句詠めるかを競う俳諧だから、今の俳句とは作り方が違う。

西鶴は、1600句（1句、54秒平均）、4000句（1句、21・6秒平均）を、生國魂神社で成功させた。両方とも、観客の前で興行したのだから、今でいうイベントである。詠まれた句は、『西鶴俳諧大句数』（1677「延宝5」年刊）『西鶴大句数』（1681「延宝9」年刊）という本になって出版された。4000句のときには、興行スタッフが55人、観客は数千人に及んだと記録されている。

周到な準備と事前の宣伝で「矢数俳諧」をイベント化する。成功したあとには、観客の口から、大坂発の噂が地方に伝わっていく。西鶴自身も地方俳壇の有力者に出した書簡で噂の種を自ら蒔き、自己宣伝につとめる。さらには、このイベントを本にして売る。

こう考えると、西鶴の俳諧活動は、イベントと出版とをコラボしたメディア・ミックスそのものだといえる。現代人によくみられる自分の能力に枠をはめてしまう考え方をしない西鶴は、

常識をくつがえす発想と実行力を兼ね備えていた。

年相応に稼ぎ、遊ぶ

そういうベストセラー作家西鶴だから、日本で最初の経済小説『日本永代蔵』や、低成長時代の庶民生活を笑いで包んだ名作『世間胸算用』を世に残すことができた。ふたつの作品に共通するテーマは、商人の生活力である。

大坂人西鶴は、大坂で生きている人々が共感するような教訓を述べる。たぶん、現在の大坂人も同じ考え方をするかもしれないが、親から譲られた財産や、働かなくても得られる利息や家賃で遊ぶような、生活力を喪失した若者に対してはきわめて辛辣である。

町人も、親に儲け貯めさせ、譲り状にて家督請け取り、仕にせおかれし商売、または棚賃、貸し銀の利づもりして、あたら世をうかうかとおくり、二十の前後より無用の竹杖、置頭巾、長柄の傘さしかけさせ、世上かまはず借上男、いかにおれが金銀つかうてすれぼとて、天命を知らず。（『日本永代蔵』巻4・1）

町人にも、親が儲けた金を貯蓄した家督を遺言状で譲り受けたり、代々続いた商売をただ守るだけだったり、家賃や貸し銀の利息を計算したりして、苦勞もせずに世をうかうかとおくる者がいる。まだ二十歳前後なのに隠居して、必要のない竹杖に置頭巾、供の者に長柄の傘をさしかけて外出する。世間の評判も気にかけないで、こんな身分不相応なことをする奢り男は、たとえ自分の金銀を使っていることだとしても、天命を知らない、けしからぬやつというのだ。

蓄財と消費、勤勞と娯樂とが程よく均衡しているというのが、このころの商人の理想的な生活だった。働きすぎも遊びすぎも、生活力を奪ったのだ。要するに、次のように生きなさい、ということになる。

人は四十より内にては世をかせぎ、五十から楽しみ、世を隙になすほど寿命業はほかになし。（『西鶴織留』巻5・1）

人は、四十歳より前には懸命に

かせぎ、五十歳から楽しみをきわめて楽隠居するほど、寿命を延ばす薬は、ほかにない。

儲かったら、人を育てよ

若いときに苦勞して稼ぐのは、自分のためだけではない。西鶴は、次のように述べている。

人は十三歳まではわきまへなく、それより二十四五までは親の指図を受け、その後は我と世を稼ぎ、四十五までに一生の家をかため、遊樂することに極まれり。なんぞ若隠居とて男盛りの勤めをやめ、大勢の家に暇を出だし、外なる主取りをさせ、末を頼みしかひなく難儀にあはしぬ。町人の出世は、下々を取り合せ、その家をおまたに仕分くるこそ親方の道なれ。（『日本永代蔵』巻4・1）

人は、十三歳まではまだ子供なので分別がないが、その歳から二十四、五歳までは親の指図を受けて商売を学び、その後は自分の才覚で金を稼ぎ、四十五歳までに一生困らぬように家業を確実にして、おいて、それから遊樂することが、最も理想的な生き方である。

若隠居などと称して働き盛り勤めをやめ、大勢の奉公人を解雇して他の主人に任せさせ、自分に将来を託した奉公人を、そのかにもなく難儀な目にあわせる。町人の出世とは、奉公人を一人前にして、その家の暖簾を多くの者に分けてやることであり、そうすることこそが、奉公人を抱えた主人のなすべきことだ。

当時の商人は、自分だけが金持ちになればいいと思っていたわけではない。奉公人を育て、暖簾分けさせることも重視していた。社員を労働力としてしか見ないアメリカ流の経営とは根本的に違う考え方をしたのだ。社員にいくら起業させようと、経営者教育も行ったのである。

家族が暮らせるだけの米（禄）しかもらえない侍は、家禄を長男に相続させなければ、家が成り立たない。2番目以降の男子は養子に出すか、独身のまま長男の家に寄食する「部屋住み」にもなるほかなかった。よほど高禄の武家でなければ分家など出来なかったのだ。

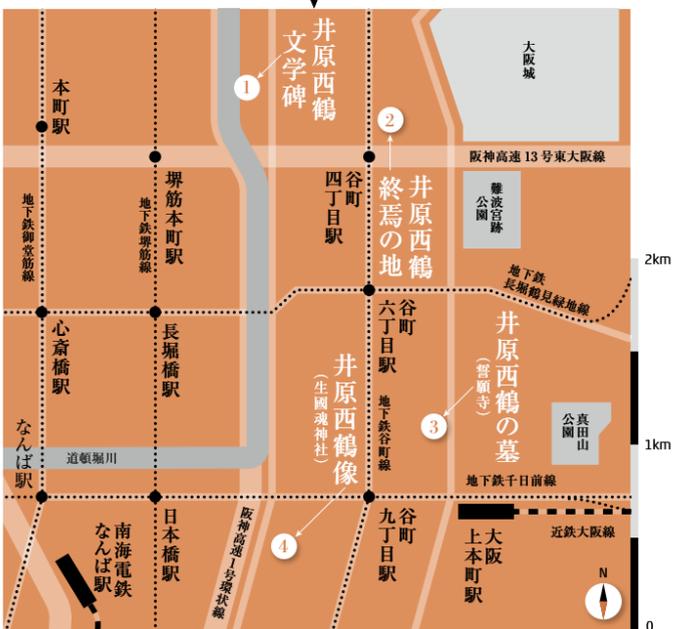
分け」は、大坂商人の生活力が生んだ知恵だったと思う。

なかじまたかし／1952年、長野県生まれ。早稲田大学大学院博士課程修了。早稲田大学教育学部教授。博士（文学）。著書に『西鶴と元禄メデア』（NHK出版／笠間書院）、『西鶴と元禄文芸』『初期浮世草子の展開』（若草書房）、『西鶴に学ぶ 貧者の教訓・富者の知恵』（創元社）、小説『はぐれ雀』（小学館）など。小説『廓の与右衛門 控え帳』（小学館）で第8回小学館文庫小説賞を受賞。

井原西鶴ゆかりの地をめぐる 大阪史跡案内



大阪



文学碑から墓まで、西鶴の足跡をたどり直せば、各所に刻まれた記憶から忘れられた当時の物語が甦る。



1 井原西鶴文学碑
石碑には「日本永代蔵」の一節が刻まれている。



1 井原西鶴像
西鶴は当地で一昼夜独吟4000句の矢数俳諧に成功した。

3 井原西鶴の墓
1693（元禄6）年、52歳で病没した西鶴はこの地に眠る。



Photograph by Nagano Ikuo